

(銀のエンジェル賞 小学生中高学年の部)

ぼくだけのリハーサル

小三・森田 柚希

ぼくは、きのうお父さんの仕事の都合でさくら町に引っこして来たばかり。この町にまだ友だちはいない。というか、ちゃんとできるかな。ぼくは友だちを作るのがあまりとく意じゃない。前の学校だって、おさななじみのゲンくんがいてくれたから友だちができた。不安でむねがいっぱいだ。ドキドキする。

「：もう一人ぼっちでもいいや。」
と、つぶやいてベッドに入った。でも、なかなかねむれない。

キーンコーンカーンコーン

学校のチャイムがなった。ぼくは、いつの間にかしよくいん室にいた。目の前には、むらさき色のアゴの長いナスの顔をした人が立っていた。

「え、だれ？」

ぼくの頭の中は？だらけ。そしたらそのナスがきゆうにしゃべりだした。

「小林ゆう太くんだね。わたしはこの学校の校長先生です。きみは三年三組。たんにんの先生は、こちらにいるモモ先生だよ。」

ナス先生の横にはピンクのほっぺがふっくらした女の先生が立っていた。ぼくはわらいをこらえるのにひっしだった。だってどこからどう見てもナスとモモなんでもん。

しばらくして、ぼくはモモ先生といっしょに三年三組の教室に入った。心ぞうはドッキンドッキンなつとび出しそうだった。モモ先生が、

「てん校生をしようかいします。ゆう太くん、自こしようかいをしてください。」

と言ったけど、ぼくは顔を上げられない。じつとだまったままで下をむいていると、

「ゆう太くん？だいじょうぶ？」

いきなり目の前にでっかいモモがでてきてびっくりした。ふわつとモモのおいがした。

そのおかげで、きんちようがほぐれた。

「小林ゆう太です。よろしくおねがいます。」

…やつと言えた。

ぼくは一号車の一番前になった。となりのせきはミカンのミカちゃん。ミカちゃんはぼくより先に声をかけてくれた。

「よろしくね、ゆう太くん。分からない事があつたら聞いてね。こちらがわたしの親友のユズちゃん。あのメガネの男の子が学きゆういいんのネギくんだよ。」

「そうなんだ。こちらこそよろしくね。あの、もしよかつたら学校の中をあん内してくれないかな？」

ぼくはゆう気をだして言った。ミカちゃんはにっこりしてうなずいた。ぼくはホツとした。ぼくにしてはがんばつたと、思った。

目を開けたら、ぼくはベッドの上にいた。あれ？ぼくは教室でミカちゃんと話していたんじゃないか？時計を見ると朝の七時。

全部ゆめだったのか：それにしてもおもしろいゆめだったなあ。ナスにモモにミカンにユズ、ネギもいたっけ。思い出してフッフとわらった。

「ゆう太！おきて朝ごはん食べちゃってー。」

お母さんの声が聞こえてあわててじゅんぴをした。そうだ。今日は、はじめて新しい学校に行く日だ。

学校に着いてしよくいん室に入ったら、おじさん先生がむかえてくれた。

「こんにちはゆう太くん！わたしは、なす校長です。よろしくね！」
ぼくはプツとふきだした。今日見たゆめといっしょだ！顔はむらさきじゃないけど、あごはちよつとにてるかも。ゆめではこの後モモ先生をしようかいしてもらったんだっけ。

「こんにちは。ゆう太くんのたんにんのももはです。もも先生つてよんでね。」

ピンクの服を着たやさしそうな先生がニコニコ立っていた。：またゆめといっしょだ。もしかして今日のゆめは正ゆめだったのかな。クラスにはミカちゃんもユズちゃんもネギくんもいるのかな。教室に行くのがちよつとだけ楽しみになった。教室に入るとみんなきょうみしんしんでこつちを見ていた。やっぱりきんちようする。ぼくの心ぞうもドツキンドツキンになっていた。でも、ゆう気をしばって大きな声でじこしようかいをした。

「きのうひっこしてきた小林ゆう太です。なかよくしてください！」
自分でもびっくりするくらい大きな声がでて、みんながはく手してくれた。もも先生が

「ゆう太くんのせきはここよ。」

とあん内してくれたのはやっぱりゆめと同じ一号車の一番前だった。
という事はとなりはミカちゃんなはず：

「名前教えて？」

ぼくはとなりの女の子に声をかけた。

「みかだよ。高はしみか。よろしくね。」

みかちゃんはニコニコして答えてくれた。

「もしかして親友はゆずちゃん？」

ぼくは聞いた。

みかちゃんはびっくりして答えた。

「なんでわかったの？」

「なんとなくね。」

ぼくは言った。きっとこのクラスの学きゅういいんはめがねのね
ぎくんだ。
